

令和7年度 地域連携推進会議 議事録

1. 日 時 令和7年11月20日(木) 16時15分～16時40分
2. 場 所 福岡視力障害センター 会議室
3. 出席者

【外部委員】

- ①足立 慎一 氏（特定非営利活動法人 SOS 子どもの村 JAPAN 子どもの村福岡 村長）
- ②浦志由美子氏（医療法人永寿会シーサイド病院 地域包括ケアシステム推進係長）
- ③木下 志穂 氏（福岡市今津公民館 主事）
- ④木原 宏三 氏（福岡市社会福祉協議会 西区事務所）
- ⑤視力センター自治会長
（欠席：利用者家族）

【内部議員】

谷内所長、藤本教務課長、小山支援課長、稲葉庶務課長、田端主任教官ほか

4. 議 事

（谷内所長）

本日はお忙しい中、第一部の「訓練公開」から長時間にわたりご参加いただき、誠にありがとうございます。

当センターがどのような訓練を行い、どのような強みを持っているのか、実際に「手引き体験」や「授業見学」を通して感じていただけたかと思えます。また、先ほどは利用者2名を交えた懇談会でも貴重な生の声を聞いていただきました。

これらを踏まえ、当センターの強みをどう地域に活かしていくべきか、またセンターをより開かれた場所にするために何が必要か、忌憚のないご意見をいただければ幸いです。

（木下委員：今津公民館）

授業見学では、利用者の皆様が真剣に高度な専門知識を学ばれている姿を拝見し、改めて教育環境の質の高さを理解しました。

かつては地域の運動会などの行事を通して交流がありましたが、社会情勢の変化でその機会が減ってしまったのは残念です。現在はセンター自治会の皆様と公民館が連携した交流事業を継続しておりますが、今後もこの繋がりを絶やさず、より深めていければと考えています。

(浦志委員：シーサイド病院)

センターのすぐ近くに住んでおりますが、実は街中で利用者の皆様をお見かけする機会が少ないという印象を持っていました。今日の訓練や宿舎見学を通して、入寮されている方々の生活動線が意外と地域と重なっていないのではありませんか、と感じた次第です。

以前、当病院で視覚障害者の歩行介助研修を行っていただきましたが、そうした専門スキルの共有を通じた連携は、地域にとっても非常に有益です。今後も継続的な協力関係を築いていければと思います。

(足立委員：SOS 子どもの村)

これまでは外から建物を見るだけで、中でどのような方々が、どのような想いで過ごされているのかという「人的要素」が見えていませんでした。

私たちの活動も「自立支援」や「里親家庭から社会へ送り出すこと」を目的としており、通底する課題があります。先ほどの利用者 2 名との懇談会でのお話は、葛藤や希望が伝わるとても素晴らしいものでした。

目に見える技術だけでなく、困難に直面した方々の心にどう寄り添うのか。センターの持つメンタリティや心理的支援のノウハウから、私たちも学びたいと感じました。

(木原委員：西区社協)

以前、暗闇体験に参加させていただきましたが、今日の授業風景を拝見して「学びの深さ」に改めて驚かされました。

私は海外の障害者福祉を視察した経験がありますが、諸外国に比べると日本はまだ障害者と地域住民が分断され、施設の中に「閉じ込められている」ように見えてしまう側面があります。子どもの頃から自然に関わる機会がないため、大人になって急に「平等に」と言っても難しいのが現状です。

例えば、玄洋校区では 2 年に 1 回、災害時の避難訓練を実施しています。こうした地域の防災活動にセンターとして参加したり、体育館を開放して地域交流イベントを開催したりするなど、もっと外の空気を入れる工夫があっても良いのではないのでしょうか。今度、石丸小学校 4 年生の総合学習にお邪魔しますが、こうした地道な啓発活動を広げていきたいですね。

(自治会長)

利用者の立場から地域連携について申し上げますと、視覚障害者は情報を得る能力がどうしても限定されてしまいます。地域で何が起きているのか、どのような助けがあるのか。この情報格差を改善し、地域と情報のやり取りがスム

一ズにできる仕組みを整えていただけると助かります。

(谷内所長)

ありがとうございます。

今日は何かを決定する場ではありませんので、さらに思いついたことがあれば自由にご発言ください。

(木下委員：今津公民館)

公民館の公式な事業としてだけでなく、例えばセンターの皆様が日常的にふらっと立ち寄れるような、顔の見えるコミュニケーションの場が普段からあると理想的ですね。

(谷内所長)

センターの歴史を長く知る田端先生、今の意見を受けていかがでしょうか。

(田端主任教官)

私は利用者として、そして現在は職員としてこのセンターに携わっています。かつて定員が 160 名だった頃は、地域の運動会やセンターの文化祭・体育祭など、地域と混ざり合う機会が多かった。

時代と共に交流が減ってしまったのは事実ですが、今、自治会が公民館と繋がり直しているのは「小さな一歩」として大きな意味があります。センターには東洋医学の専門家も多数おります。こうした専門性を地域に還元する行事を一つずつ積み重ね、まずは視覚障害を知っていただくことから始めたいですね。

(浦志委員：シーサイド病院)

東洋医学の話に関連してですが、当院には漢方専門の医師がおります。当院の医師がセンターで漢方の話をしたり、逆にセンターの方に実技を教えていただいたり、といった、双方向の研修機会を設けるのはいかがでしょうか。前回の歩行介助研修はセンターから来ていただいたので、今度は病院側から何う形での連携も面白いと思います。

(谷内所長)

それは良い提案ですね。卒後研修などの枠組みもありますので、ぜひ具体化させましょう。できることから一つずつ積み重ねることが大切です。

こうした交流は、利用者の皆様にとっても生活の程よいアクセントになりますし、何より情操教育の面でも大きなプラスになります。

庶務課長、事務方の視点から何かありますか。

(稲葉庶務課長)

地域連携を深めるべく、現在、今津福祉村部会の連絡網を作成するなど試行錯誤しています。施設内外で円滑に情報共有ができるサーバー構築や連絡体制の整備について、現在検討を進めているところです。

(谷内所長)

教務課長からも一言お願いします。

(藤本教務課長)

先ほどの田端主任教官の「小さな一歩」という言葉が心に残りました。大きなイベントだけでなく、今日のような顔の見える対話を大切にしていきたいと思います。

(小山支援課長)

当センターにおけるBCP、権利擁護、透明性の確保等に関する取り組みは、事前レクチャーでの説明のとおりです。この場で何かご意見やご質問はございますか。・・・(特に無し)

(谷内所長)

皆様、本日は長時間にわたり貴重なご意見をありがとうございました。

今日いただいたヒントを一つずつ形にしていければと思います。今後もお気づきのことがあれば、いつでもご連絡ください。